

2022年1月25日

2021年度 聖路加国際大学大学院看護学研究科
修士課程 課題研究

乳がん患者に対する認知行動療法に関する文献レビュー

**Cognitive Behavioral Therapy for Breast Cancer Patients
: A Literature Review**

20MN017

高木 美帆

要旨

【目的】

乳がん患者に対する認知行動療法について文献レビューし、対象患者の特徴や効果的な介入プログラムの内容を明らかにし、看護師による乳がん患者への心理的ケアに関する示唆を得る。

【方法】

文献検索は Cognitive Behavioral Therapy : CBT (認知行動療法)、Nursing Intervention (看護)、Breast Cancer (乳がん) をキーワードとして「PubMed」と EBSCOhost の同時検索システムで「MEDLINE」「CINAHL」「APA Psycinfo」から検索、2011～2021 年に出版されたものを抽出し、本研究の目的に合致している対象文献を選定した。選定した文献について対象者の特徴、介入プログラムの内容、看護師への教育や訓練の内容、介入の効果を項目ごとにアブストラクトテーブルを用いてデータを分析した。

【結果】

文献検索の結果、本レビューの目的に合致している 8 編の論文を選定した。CBT は比較的若年で全身状態の良い対象者に行われていた。プログラムの内容は症状マネジメントに関するもの、マインドフルネスや問題解決療法に基づいたものがあった。プログラムは複数のセッションで構成され、個人への介入、集団への介入、個人と集団を合わせた介入があった。介入により、抑うつや不安、再発の恐れ、心的外傷に関して効果のみられたものがあった。介入は、精神科看護の経験や CBT に関する経験を有している者、また CBT の教育を受けた者が実施しており、サイコオンコロジーの専門家からの指導を受けていた。

【結論】

乳がん患者は女性性への影響、社会的役割や人間関係に関する困難を抱え、長い不確かな予後のなかで再発の恐れを抱えながら生きている。それらの苦悩に対して、また、心的外傷とも言える困難な体験から人生における肯定的な変化を見出すことに対しても CBT は有効なケアである。看護師が CBT を提供するためにはサイコオンコロジーの専門家からの指導やプログラムに関する教育が必要であり、乳がん患者が参加しやすく、継続可能なプログラムや環境づくりは今後の課題である。